

衛星追跡によるカワウの行動圏調査

高木憲太郎・加藤ななえ（バードリサーチ ・ 財団法人日本野鳥の会）
・福田道雄（東京都葛西臨海水族園）・茂田良光（財団法人山階鳥類研究所）
・田辺仁・中澤圭一（環境省自然環境局野生生物課）

カワウ（*Phalacrocorax carbo*）は、かつては日本の水辺ならばどこでも見られた鳥だったと考えられている。しかし、1950年代以降、有機塩素系化学物質などによる環境汚染や、沿岸や水辺の開発、狩猟など複数の要因が複合的に影響して、1970年代前半には全国の生息個体数が3000羽と推定されるまでに減少した。しかし、1980年代に入ると水質を含めた環境の改善などに伴って急速に個体数を回復し次第に分布も広がってきた。2000年の推定では全国に生息するカワウの個体数は50,000～60,000羽と推定されるようになり、漁業被害やコロニーでの樹木の枯死などの問題が大きく取り上げられるようになってきている。

被害を軽減しカワウの保護管理を考えるためには、その行動圏を把握することが必要となる。しかし、カワウの1日の行動圏は広く、ねぐらから50kmほど離れたところまで採食に行くこともあると言われており、個体を追跡してその行動圏を明らかにした研究はまだない。

そこで、東京湾を中心に関東圏で生活していると思われるカワウの行動圏を把握するために、2002年12月～2004年4月の期間に、東京湾沿岸の3ヶ所のコロニーにおいて、2才以下の若鳥や抱雛期の親鳥を含め合計16羽のカワウを捕獲しアルゴシステム用の送信機を装着して放鳥した。それぞれの個体について10日～4ヶ月の期間追跡することができたが、一日の行動圏は直径10km～90kmと、個体によって、また日によって大きな差が見られた。また、同じコロニーで捕獲したカワウでも、個体によって利用する採食地やねぐらが異なっていることが確認された。この他、同一の個体が数日間という短い間に複数のねぐらを使い分けていることや、ねぐらを変えても同じ採食地を利用しているといったことが確認された。

この調査の一部は、環境省の委託事業として実施したものである。

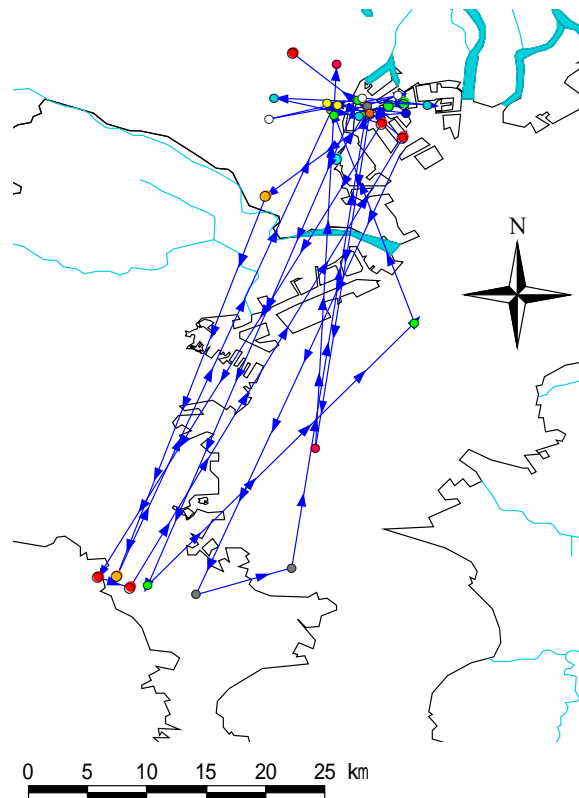


図. 2004年3月16日から4月1日までに衛星追跡によって得られたカワウ1羽の位置データ(●印)とその経路(→印).

この期間この個体は地図上部の第六台場コロニーでねぐらを取っていた。